

第 62 話 (39 頁) くるみのえだ

あるお金持ちの商人に、3人のむすめがいました。商人は商売に出かけるしたくをすると、むすめたちにおみやげは何がいいかたずねました。上のむすめはネックレスをたのみました。2番めのむすめはゆびわをたのみましたが、下のむすめはこう言いました。

「わたしは何もありません。もし、わたしのことを思い出したら、くるみのえだをもってきてください。」

商人は出かけていって仕事をすますと、上のむすめにはネックレスを、2番めのむすめにはゆびわを買いました。

もう帰り道で大きな森を通りぬけていると、ふと下のむすめがくるみのえだのほかは何もほしがっていなかったことを思い出し、商人は馬車からおりると、くるみのえだを折りに歩いていきました。ふと見ると、くるみのえだが、しかも、ふつうのえだではなく金のくるみのなっているえだがありました。

商人は思いました。

「これこそ、あのかしこい末むすめのためのプレゼントだ。」

えだをまげて折りました。するととつぜん、どこからやってきたのか、クマが商人のうでをつかんで言いました。

「きさま、よくもおれのえだを折ってくれたな。すぐにおまえを食ってやる。」

商人はこわくなって言いました。

「えだをとるつもりはなかったのですが、ただ、末むすめにたのまれたので。」

クマは言いました。

「家に帰れ。だが、おぼえている。うちで一番はじめにおまえをでむかえたものを、おれによこすんだ。」

商人が約束すると、クマは商人をはなしてやりました。商人は馬車をすすめて、家につきました。

馬車が中庭に入ったとたん、商人のもとにかけよってきたのは、かわいい末むすめでした。商人は、さいしょに自分をでむかえたものをクマにやると約束したことを思い出し、いっしゅんぼうぜんとしてしまいました。

商人は自分の身におこったことと、末むすめをクマにくれてやらなければならないことを、すべて話してきかせました。みんなはなきだしました。母親が言いました。

「なくことはありません。いいことがあります。クマがうちのむすめをとりにきたら、牛かいのむすめにいい服をきせて、かわりにくれてやりましょう。」

あるときみんなが家にいると、中庭に箱馬車が入ってくるのが見えました。み

んなはじっと目をこらしました。すると、箱馬車からクマがおりてきました。クマは商人の家に入ってきて言いました。

「むすめをよこせ。」

商人はなんと言っていていいかわかりません。母親はすぐに牛かいのむすめにいい服をきせてやると、クマのところへつれてきました。クマはむすめを箱馬車にのせて、出かけました。箱馬車が出るとすぐ、クマはうなりごえをあげて、牛かいのむすめを食べようとしました。するとむすめは、自分は牛かいのむすめで商人のむすめではありませんと白状してしまいました。

クマは商人のところへ引き返してきて言いました。

「きさま、だましたな。ほんとうのむすめをよこせ。」

みんなはないてむすめに着物をきせ、わかれをつけて、クマにわたしました。クマはむすめを箱馬車にのせると出発しました。馬車はどンドンすすみ、大きな森につくと、そこで止まりました。クマは箱馬車からはいだすと言いました。

「これがわたしたちの家だ。あとについてきなさい。」

クマはあなにはいこみ、むすめもあとについて入りました。それからクマは大きなとびらをあけて、むすめを暗い地下室にいれ、「あとについてきなさい」と言いました。むすめは、こわさでぶるぶるふるえながら、もうおしまいだと思いましたが、それでも、クマのあとについていきました。とつぜん、何かが、かみなりのようにめりめりと音をたてたかと思うと、パッと明るくなり、見ると、むすめは地下室ではなく、りっぱな宮殿にいました。明るいなかで音楽がかなでられ、きかざった人びとがむすめをでむかえ、こちらにおじぎをし、そして、自分のとなりには、わかい公爵がいました。公爵が近づいてきて言いました。

「ぼくはクマではありません、公爵です。ぼくとけっこんしてください。」

「この話にはいくつか特徴があるよ。3人姉妹の末っ子で、その子は、金目のものよりも、何の変哲もない『木の枝』を欲しがった。クマが結婚相手という異類婚姻譚。動物や神と結婚するのは昔話によくあるね。クマが人間の公爵に戻って結ばれるというハッピーエンドも、昔話の一つのパターンだ。」

「小さい時、どこかで読んだことがあるような、よくある話の一つかな。ロシア民話なら『鷹フィニストの羽根』、グリム童話の『灰かぶり（シンデレラ）』とストーリーが似ている。異類婚姻譚だったら、『かえるの王女』（ロシア民話）、『かえるの王さま』（グリム童話）だって、そうだよ。グリム童話からみると、『灰かぶり（シンデレラ）』と『かえるの王さま』が一緒になった話に見える。」

「こうした話には、仕事を言いつける魔女のバーバ・ヤガーが決まって登場している。でも、

『くるみのえだ』には出てこない。なので、どうしてクマが人間に戻れたのか、そこが分からない。消化不良の感があるねえ。」

「全体を通して、『アーズブカ』にはどこにも魔女が出てこない。明らかにトルストイは魔女を避けたなあ、それはなぜかな、と思ったんだ。」

「ロシア民話の中でも『うるわしのワシリーサ』はよく知られているから、てっきり『アーズブカ』にも取り上げられているはずだと思ったら、載っていない。この話もやっぱりバーバ・ヤガーが出てくるよ。」

「なんとも興味深い指摘だね。自然の営み、秩序を大切に考えたトルストイのことだから、魔女は人の作為を感じさせると敬遠したのか。少なくとも子どもたちには魔女の存在を教えたくなかった？」

「余談になるけど、おばあさんはロシア語でも『バーバ』と発音するそうだ。面白いね。」

「そのワシリーサの話だが、バーバ・ヤガーから難題を突き付けられ、見事な答えをしたので食べられずに済み、幸せな王様との結婚が待っていた。美しいばかりか賢くもあったワシリーサと比べ、『くるみのえだ』の“下のむすめ”が機転を利かせた風はない。」

「なるほど…。『くるみのえだ』では末娘に、『かわいい』『かしこい』と二つの形容詞を付けているけど、どう賢いのか、その点の記述はないままだね。『アーズブカ』には魔女だけでなく、魔法もあまり出てこない。」

「同じ理由で、妖精も出てこないのだろうか。」

「トルストイはクリスチャンだから、魔女や妖精を嫌った面もあるのかな。」

「3人の娘が出てくるのは『リア王』もそうだ。なぜか、一番下の子がよくって、幸せになる話が多い。古くから、そういうプロットは同じ気がするね。」

「この話は一読したとき、『イワンの馬鹿』と似ているなと思った。男の子で3番目のイワンでは、聡明さではなくて実直さが強調されているけど。」

「話は変わって、終盤で『とつぜん、何かが、かみなりのようにめりめりと音をたてたかとおもうと』とある。ロシア民話では、このように、何かが起きるときに大音響が出てくることが多いんだ。」

「クマって『3匹のクマ』の話もあるように、単なる猛獣じゃなくて、ロシア的な何かがあるのかな？」

「このクマは、全部見通している。全知全能の神ならぬ動物だね。公爵は自分の意思で自由にクマに変身できるのか。」

「それは違うんじゃないの。やっぱり、公爵は魔法をかけられてクマにさせられた…。と。」

「その魔法のことが出てこないから、なぜ、公爵がクマになったのか、が読んでいても分からない。そのヒントもない。」

「胡桃の枝を、末娘が求めたのはなぜか。胡桃はロシアでは何かを象徴しているのかな。」

「どうだろうか。つまらない、変哲もないものでなければ、ここは話がつながらないよ。」

「だったら、この末娘は全く素直じゃない。父が自分を可愛がっていることを承知で、それ

を逆手にとって、父を戸惑わせているからね。」

「末娘が、自分には物欲がないという姿勢を示したら、二人の姉よりも、もっと素晴らしい結果が待っていると、そう見通していたとすれば…、なんて、勝手な想像も可能だ。」

「想像はさておき、なかなか実りの多い議論ができたね。要するに、トルストイは、この話から子どもたちに何を考えさせようとしたのか。それが、なかなか想定できにくい話の一つだということを確認して、締めくくりとしよう。」